

末黒野

すぐもの

4月号 (通巻848号)



寒日和

小川玉泉

(名譽主宰)

声だかに我が身の鬼も打ちにけり

縁側にいまま妻の座 寒日和
咳こらふ閲覧室の静かさに
歯医者への出足そがれぬ牡丹雪
声だかに我が身の鬼も打ちにけり
杖を止め見下ろす坂の花辛夷
隣よりややの泣き声ふきのたう

立春の前夜に行われて
きた鬼やらいの行事は、
地域ごとに趣をことにして
いる。大きな社寺では、
盛大に行われるが、一般
家庭では、隣近所に気兼
ねして、小さい声での行
事になつた。樹にいれて
神棚に供えた大豆を「鬼
は外、福は内」と大声で
唱えながら四方に撒き、
心の鬼から、退治するこ
とを誓つた。

冬ざれや

はたはたと羽音ゆたかや初鴉
篝火へ闇の攻め来る初詣
大本山影も正しき冬木立
寒椿寺に飼はれて孔雀啼く
ぼうたんの冬芽ほつほつ禪の庭
冬ざれや光となりて峠の川
海中の不如帰の碑雪
風や磯馴の松の御用邸
寒林の吐く闇の濃し杣
駅を乗り継ぐ句会息白の道
読み止しの句集歳時記
み来る寒濤碎き烏帽子
下岩く道催
記寒灯

松本三千夫

小氷柱大氷柱

黒滝志麻子

(副主宰)

鐘樓のまはりに拳り冬木の芽
潮の香や入江の宮の初詣
若水を汲む産土の星の下
麻縄の結び目固き初荷かな
雪吊に雪降り景の定まりぬ
飛行機雲縦に流れて冬うらら
飛驥の日の薄し小氷柱大氷柱
山茶花散る道子等の帰る道
なほざりにせし寒菊や淡き紅
ふつときてダリの眼となり冬の蠅
出航やどつと四温の鷗どち
いつせいに鴨に鳴かるる寒さかな

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

日向ぼこ

森 清 信 子

児にもらふほんとの笑顔日向ぼこ
除夜の鐘しみゆく闇の深さかな
堂裏の藪をゆるがし除夜の鐘
透き通る沢の水音鍬始
霜降りつ深々と富士暮れ落ちぬ
張り詰むる星座際立ち空つ風
武家屋敷の高き黒堀六花
迸る水にふくらむ冬菜かな
墨の香の残る座敷の淑氣かな
峠より淡き昼月枯木立

枯木山

安斎久英

墜道を抜け満目の枯野かな
凍蝶の折り目正しく事切れぬ
山眠る餌を欲る鯉の息づかひ
のしかかる雲支へをり枯木立
瀬音鳴る枝さし伸べて冬紅葉
暮れなづむ沼忽ちに鴨の陣
年の夜や悔いを明日への糧として
手の平に神木の気を初詣
曾孫の腕にすしり明けの春
七福神の絵柄揃へぬ柳箸



咳一つ

石黒興平

新年

田中臥石

大嘆満座の視線集めたり
持ち寄りの駄句を肴に年忘れ
鮫鱗の箱の形にをさまりて
張り詰むる内視鏡室咳二つ
気ままなる年金暮し去年今年
まつすぐりに男坂ゆく初詣
なつかしきお国なまりの御慶かな
淑氣満つ所作ゆつくりと能舞台
初買や活字の大き旅の本
いささかの夢あたたむる初湯かな

除夜の鐘撞くてふ妻や梳る
海へ出て一気に昇る初日の出
年酒酌むいきなり灘の生一本
ふるさとの謡醉顔松の内
海ひびくいさばの径の薺摘む
海の日の犇犇届く仏の座
娘訪ふ墳垣を透く寒紅梅
冬日射す娘の家の高框
成人の日の海荒るる九十九灘
朝食の残り数の子噛みゐたり

冬木の芽

森 清

堯

夕照の燃えむばかりの枯野かな
小流れの音曲り来ぬ片時雨
枯すすき撓りてもなほ筋通し
十二月書き消す跡へ予定また
初日燦眼下の湾を見て飽かず
筑波嶺の空を傾け初鳥
ひとり居の母や八度の年女
向き変ふる連れにつられて日向ぼこ
刃を入れて締まる白菜音高く
冬木の芽こぞりて隱岐の空の下



乙 矢 集

配列は音順
（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



寒 林 加藤 静江

胸元の香りを数へ冬至風呂
俳句めくや捨つる省くの年用意
沈黙のやがて響めき初日の出
言靈の幸はふ國や初御空
百軒の百のしきたり大旦
真白なる未知の重さや初日記
寒に入る重たきものに吾が齡

初 日 記

岡野里子

年の暮御朱印帳の滲む墨
夜回りの人にはと言繰る雨戸
供花に剪る垣の山茶花まぐれなゐ
足早に過ぎ行く齋除夜の鐘
宝とも思ふ句友や初便り
座禅堂にひびく警策四日早
潮入りの離宮の水面浮寝鳥

初 便り

菅野日出子

漱石忌落葉溜りの文学館
寒林を透けくる空の深さかな
冬空を映して深き湖の藍
付きまとふ甘栗売りや空つ風
梁の黒き旧家や掛衾
日溜りの橋のたもとや冬木の芽
光満ちて四方より鳥語大旦

お年玉

斎藤マキ子

竹

林

吉田きみえ

かさかさと枯葉の音を袋詰
注連絹ふや牛飼ふ里のかぞへ唄
短日や遊び足らざる子らに風
煤掃や書架に俳書の増えてきし
風花やこの青空のいづくより
のけ反れる嬰にも渡すお年玉
真似事で済ます二人の七日粥

鳥総松

堺昌子

初夢

今村千年

山茶花や雲脚早き露天風呂
早咲きの梅のかかるや神ながら
子等の眼のきらとかがやくお年玉
子にきいて孫におそはる寒昇
艤綱は鷗の抛り所寒の潮
筆書きの賀状の友や息災と
長湯してつかれ流せり鳥総松

一雨に落ちて紅増す冬椿
千両を活けて客待つ昼下り
枯るるもの枯れ竹林の風の音
里山の空の深さや冬ひばり
戸を繰るや庭一面の霜柱
五日はや人の溢るる町医かな
枯菊の雨の重さを束ねけり

沖へ船

大川暉美

春浅し風の硬さの触るる谷戸
鶯の声に膨らむ里の朝
柔らかなる春日押し行く乳母車
櫻大樹花の色なる風の舞ひ
パン焼くる匂ひほのかや衝薄暑
田に映る雲引つ張つて水馬

白壁に影の舞ひをり揚羽蝶

本堂の補修の木の香梅雨晴間

風 鈴 や 次 の 風 待ち 音 を 待ち
金 柑 の 花 の 散り 敷く 路地 住まひ
風 通 ふ 風 の 形 の 花 芒
ネ ッ ク レ ス 外 す 窓辺 や 夕月 夜
秋 の 夜 や ル 一 ペ 片 手 に 旅の 地 図
子 ら の 声 聞かぬ 里道 木 の 実 落 つ
木 仏 の ひび 深々 と 冬 立ち ぬ
天 つ 日 に 秘むる 力 や 冬 木 の 芽
百 畝 の 堂 に 棲みつく 寒さかな
と も し び の 影 や はらかき 聖夜 かな
岬 鼻 を 攻 む る 怒濤 や 野水 仙
寒 凪 や 光 ま と ひて 沖 へ 船

春 疾 風

庵 原 敏 典

かビ瓦秋過秋山天薪茅風瑕式木江
はニ斯徽疎澄峽草能屋薰瑾典のの
らけル灯とむの干か根るなに芽島へ
に雨のやな霧すがや幼き連キ帆を
巫のあり時鄙り崩空れンを集
女花くいゆのの火にに立の塔め
注室くよ底諸爆生のまつ塔
ぐ蟹とよ港生のぜふ母のり
神の見色とりのぜふ母のり
酒のやえ濃瀬てる母聖の瓦
のほ小口漁闇夏春
のま夜ぬき一音師闇夏春
淑氣ちし葛力母聖の瓦
かかぐ一のルか老深の若五春
ななれ解花線ないめ草き月給び風

夕映え

池谷鹿次

水羽秋故夕秋岬漁芋竹湖湯夕落そ
仙衣草郷映茄山火の林やの映椿よ
やのえ子の葉に入宿え風に
原はのを一見にを岬や
謂に富も樹え朝帰瀬まの湖
崖れく士ぐにと面
のつ望迫やや露る音ひ風を
下松き千りの遠光雀に台の撫
より來日よしるかる混地
り今里るまり三谷夕大夕梨る
小朝刈野ぶど日戸へ
波鳥の路しのくこのの焼花河の糸
の來富田のくこのの焼花河の糸
音る士原秋てろ月道雲野鹿花す柳

身辺整理

小沼ゑみ子

過一糸敬桔風鎌蠅幼彫昭漱蝶春ぼ
去仕瓜老梗入倉帳児塑和石番光け
棄事忌日やれのやに館ののや封
つしやや梅缶もの日居き寄じ
るて岸紅規入根故とて護
身ひ二少庵れも二るに疎音何摩
辺とま個溜裸開すの木
整体丁し庭隅書る木納
理み濃のたの息婦を
路肩よ期や像語斎余博め
小昼夜く文たし限風風り花寒打ぬ
六の多祝庫た段切薰青合のかの初
月虫き膳藏き葛れるしひ昼な木詣

ふるさと

片岡さか江

山 靴 風 木 帰 新 好 迷 新 茄 父 荒 青 し 微
裾 音 風 枯 り 酒 日 ひ 書 子 の 梅 葉 な 塵
のぎや た 酌 や 込 買 日 雨 や
の きみ 考 む ふ 潟 の 潮 粉
刻て無 ふ 紅 路 夜 の 酒 山 魚 に の
藁 む 水 入 る の 地 学 紫 看 を の 五 打
蓑 二 面 駅 さ 好 に 削 体 藍
き 拍 に 舎 と 染 に 子 紺 添り 反
め 社 に 美 ふ て 太 ら 子
子 鴨 に の の や 夜 しる 降 く す 二
の あ を と 秋 は 御 釣 や つ
師 の 子 り 小 項 ろ う 短 強 に 春
家 走 陣 供 り 朝 の の 雛
初 来 二 の 六 ま ろ らく の かけ の
雀 る つ 絵 月 で 汗 ら て 膳 な り 宿 雲 祭

半夏生

滝沢いみ子

除草鎌谷海町ぐ水山美鰐更鯉花臥
夜の倉戸紅店んの莊智口衣幟菜竜
の花へ歩豆のん輪子の二風群梅
鐘谷紅き遠閑と妃ののの添
と葉銀きちびつづの綱水へ
ど川狩の汀軒てつくし新平木
く岳と波の先凌けしきし線の
心のや立風の咲霄合笑風どを竹
の耳賑つう花きうや顔き生ん遠の
平垂て八合半れとく新
か二へ芒け菖る水ケの夏け蹴しし
なつり原て蒲る馬岳花生りりてき

水

鏡

塚越弥栄子

日 灯 警 淡 梵 蟬 月 二 ど 沖 馬 花 野 温 延
表 に 笛 々 鐘 生 映 人 こ 波 車 曇 梅 も べ
映 に と の れ 居 ま の 道 り 咲 り 段
や え う 落 音 て し の で の 紙 く を を
小 て 明 ご 葉 色 必 峠 刻 も 淡 春 ナ 素 空 足
紋 日 く 溜 に 死 の ゆ 空 き 風 プ 朴 押 裏
め へ この 駆 光 に キ の し に
と 豆 り も 構 代 や け に 乗 ナ 風 上 伝
き つ 汽 の る へ 田 や あ る に の げ え
た な 車 音 残 梅 の 新 が 汽 書 清 路
る ぐ 秋 を 暑 の 茶 れ か 笛 くらの 梅
白 冬 障 の 踏 か 木 水 汲 初 も か 略 か た 見
桜 子 雲 む な に 鏡 み 燕 め な 図 に う 寺

耕転機

大霜朗

人 ポ バ 短 冬 赤 大 蒼 椎 疎 マ 小 公 訣 怖
生 ス ケ 日 野 き 輪 天 の 開 一 流 道 も づ
の タ ツ や 菜 実 の や 実 時 レ れ に な づ
の 自 農 図 三 桐 踏 の ト 春 く と 差
出 一 水 を 飯 の ツ の 鶯 走
会 の 飲 転 婦 鑑 本 の き 寺 を 泥
ひ 画 車 み に に 仕 実 れ を ち の 散
に 鉢 干 灯 重 探 立 の て 訪 る ら は
感 四 す す す す た 白 占 か く こ
謝 色 牛 部 き す て 問 ひ づ し な
の の 今 わ し
初 春 息 活 背 朝 菊 わ 遊 麦 好 耘 耕 軍 鷄
句 近 白 の 負 の 花 な 歩 の 嫌 き の 耘 風 の
会 し し 子 籠 冬 展 る 道 秋 ひ 角 機 車 籠

春兆す

加瀬伸子

端初福氏事石窯火西爽袖抽京春鬼
溪護梅神始踏出櫻行や垣斗の瓦
摩とのめ花のしのかのに香日を
の佳千の歌に棕想ふ
硯高き木京安壺碑ア欄想和壁は
のき菓房ににひ綴り
火子に投にいのり
うあ舞小耳染ル出ぢ塗り
みのま姫島あげみデたのり
み穂名のり入り固句込包
やややねの真入れる調し帳むみ
紫初し砂鳥唐秋文牡み春左春
寒衣茶初抜女來辛の学丹更兆官の
の明衣の水袖湯り紋碑る子雨館園衣す饅雪

菖蒲湯

芝田幸惠

朝秋大爆心緋意春春大鯫小秋雜針
顔灯地音太 牡志灯眠空鰯春天念持
の塗這の丹通のやを鍋日へを つ
ま過さのすひ四さ湯や吸一 手
だりふぎさ屈晚と肢さ氣猫ひ気 と
咲の根た託節つもへもの込にに
きのるどひ五て氣あま揺は
き絛力あ啜ともと感瘦炎 止
き台ことつもせもくれる止
ぬ祖そりふりになしあびゅや まる
高母炎て翳白夕き枯がはくと 秋
さ夏暑りつ餉ご木り体小ろ思
か讓のか男かつあとかけご海ろか
なり草な前なじりしなりと線汁な

白牡丹

山口

登

書秋手千日小川鮎初鎌梅白乗間連
きの料枚焼半風の蟬倉雨牡り合扇
初虹理の時を骨やや丹は良揚
め富の田子待箸丁一初ス虫すき
め味畦の待箸丁一初ス虫化が
や士はに少つ休寧節夏カ一粧初
の墨ひなもイ刷音る
裾ひ色めにのの匹の尾
痕ゆく土ツくと
野た添な用とぬ声風りを子ど先
滲をかふりのしく定負一包やく富
む包零ぬのみの句士
蘭み余始鰻船白まふ硝う会
亭込子寺業か料きら寺子こらかの
序み飯丸式な理指ず詣窓みらな山

古都素描

高木邦雄

身 京 秋 秋 水 秋 影 秋
に 焼 晴 深 澄 の 昼 老 僧 下 や
入 を 商 の 三 十 六 穆 む や 跡 塔 や
む 路 地 の 六 峰 門 水 朔 上 や
韻 の 高 錦 下 る る ね
長 ふ の き 峰 魚 の の ね
き 暮 日 置 禅 の の ね
暮 の 濃 か の の し
の 鐘 し ず 寺 影 の 道 雲
の

銀閣や秋天統ぶる鳶の笛
回廊に木沓の響く七五三
鳴き龍の声招くかに秋しぐれ
風湧くや木の実降り来る堂庇
落柿舎の句碑の湿りや昨夜の露
笑みこぼすわらべ地蔵や菊日和
洛北の里の山畑柿熟るる
鱗雲影清かなる池の面
秋澄むや弥勒菩薩の指細く
森閑と暮るる奥社やそぞろ寒
舟溜柳散り込む水の面
灯の遠き古都のタワー や星流る

青炎集

松本三千夫選

横浜

及川照子

狭山

沼崎千枝

初夢や記憶の人のみな優し
熊の出る噂を抱き山眠る

青墨の匂ふ掛軸初座敷
健やかなる命寿ぐ雑煮かな

埋み火をおこし親しむ峠の宿
姫にはおうなの夢や枯野行く

横浜

正谷民夫

横浜

前原マチ

蕪汁秩父の雲の動きけり
煮凝の小骨探して虫眼鏡
猿枕後期高齢二人住み
雪晴の越後の里や光りをり
ゲレンデの若さの中を滑りけり
冬満月川面を統ぶる午後十時

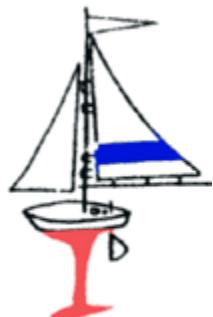
夜神楽や細女命の指太き
着ふくれて拌む糀尊苦行像

電飾の綺羅より遠く聖夜更く
正月や八臂弁財天笑まふ

拾萬両飾り小判の賑ははし
初富士を上りの窓に新幹線

及川照子

ドック跡に若人あふれクリスマス
冬ぬくし古刹の千のまねき猫
静寂の寺町通り風況ゆる
出番待つおかめと会話里神楽
三が日舟の形の月澄みて
瓦斯灯に馬車の彫刻松飾



横 浜 川 美 智 子

横 浜 東 小 蘭 美 千 律

純白の峰の輝き桟の宿

数の子やほんのり甘き加賀の酒
買初の試着に迷ふ少女かな

たつぶりの初湯や癒ゆる足を伸べ

港の灯の物語めく冬の旅

船旅や寒満月の中天に

横 浜 梅 田 武

かき揚げは我家の決り晦日そば

齢百病知らずの炬燵猫

腕白の腕白となる二日かな

黒豆の艶に満ちたる淑気かな

寄せ植ゑの福の要や福寿草

蒼天や小鉤きらりと梯子乗り

横 浜 川 村 亘 子

古里へ続く青空初御空

むつみ月むすめふさせ競ふ子等

茜さす夕富士の默寒に入る

一と日ただ雨音密か寒四郎

寒月光音遠ざかるハイヒール

白早梅薄うす残る暁の月

砂被りに漬し島田や初相撲
櫻襷市や客も主も歌舞伎者
寒満月浮かびし顔の愉悦かな

朝日浴び飛び発つ鷺や冬の川
仕舞湯や柚子ゆらゆらと背に触れ
朝なざな見慣れし富士の御慶かな
枯蓮の皇居内濠朝日影

冬日和苔ふんはりと石被ひ

横 浜 饗 庭 惠 子

仏壇へひとりごちたる寒さかな

鷺降りて枯葦の景ととのひぬ

憂きこともまとめて括る札納

霜の朝蜂蜜の糸とめどなく

池底の硬貨ゆらぎり寒日和

大寒や寛の音のより高く

川 崎 平 澤 侃

初御空地球に戦火ある不思議

初詣漢紬の畠み嫉

喰積の片減りうめる妻の所作

一と日ただ雨音密か寒四郎

寒月光音遠ざかるハイヒール

白早梅薄うす残る暁の月

耕

土

集

黒滝志麻子選

熱爛や來し方手繰る夫婦旅
真つさらに年移りゆく去年今年
見慣れたる筑波新たや淑氣満つ
成人の孫晴れやかに屠蘇交はし
トランプの如く仕分くる賀状かな

上弦の月や歩道の影冴えて

鎌倉 丸山千穂子

蹲踞に濃き影落し寒椿

海蝕の崖に寄せたる波の花

寿を交はす春着の襟白し

墨の香の満てる座敷の淑氣かな

湖の凧水尾の生まれて鴨の陣

横浜 市川 夏子

一筋の水音残し山眠る

雨後の土割りてあをあを冬の草

人日やゆるき時間を刻む音

御降りを肩に鳥居を潜りけり

裸木のつつき上りしけらの跡

中里 昌江

筆太き師の年賀状久久に

獅子舞や待ちくたびれて門の内

初句会猫の逃げ出す夕まぐれ

新年会交はすグラスの音のよき

三郷 中谷 未知

冬木立飛び交ふ鳥のけたたまし
夜回りの寒柝かすか雨上り

横浜 五十嵐富士子

臘梅の仄かに匂ふ足湯かな

些かも鐘の音待つ間去年今年

初乗の駅弁買ひて気儘旅

急くほどに体動かぬ煤払

裸木の揺るる梢に雀二羽

忙中閑座して句を詠む年忘れ

寺庭の清らに一枝冬至梅

初鴉風切る音の強さかな

飛田 典子

坂の道笛子の声に背を押され

鶏飯の炊ける匂ひやクリスマス

禪寺の寒氣貫く鐘の音

日脚伸び天神様の石畳

あをあをと大王松の淑氣かな

長田 厚子